

中国の美術教員養成カリキュラムに関する研究

平成 28 年度

徐 英杰

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士後期課程芸術専攻

本研究は、美術教員養成カリキュラムに関する歴史的な資料の分析と日本との比較を通して、中国における美術教員養成カリキュラムの歴史的変遷過程を解明し、その特徴と今後の課題を明らかにすることを旨とするものである。

そのため、本研究では 2 つの課題を設定した。課題 1 では、主に中国の 1949 年から 2016 年までの主に教員養成機関で行われている美術教員養成カリキュラムは、どのような経緯で形成されたのかについて明らかにする。その変遷の解明については、具体的に建国初期（1950～1960 年代）、改革開放初期（1980 年代）、2000 年以後の三つの時期に分けて考察していく。課題 2 では、主に戦後日本の美術教員養成との比較を通して、中国における美術教員養成の特徴と今後の課題を明らかにする。論文の構成については、課題 1 に対応するのは第 1、2、3 章である。課題 2 に対応するのは第 4 章である。

第 1 章では、中華人民共和国における建国初期の美術教員養成について、中央政府が制定した国定美術教員養成カリキュラムと文献調査をもとに考察した。まず、社会主義国家の建設を目指した建国初期の教育改革について、ソ連との関連性および教育改革の特徴を述べた。そして、当時の美術教育については、主に美術が小中学校教育課程での位置付け、ソ連からの美術教育思想、画家による美術教育思想という三つの側面から述べた。次に、ソ連をモデルとして建てられた 3 段階目的制教員養成機関とその教育課程の設置状況を整理した。最後に、美術教員養成の特徴について、各段階教員養成機関の国定美術教員養成カリキュラムを用いて、美術教科専門科目の学習内容、授業時間数の設置を分析し、そして建国初期以前の美術教員養成カリキュラムの一部との比較も加えて論考した。その結果、ソ連の影響と厳しい社会情勢の中で行われた建国初期の美術教員養成は、3 段階

目的制教員養成機関でそれぞれ異なった美術教員養成カリキュラムが作られた。それらのカリキュラムは、全体的にソ連の美術教育や社会主義的な絵画教育内容の導入と、手工教育が生産労働教育への移行によるデッサンを中心した図画や絵画教育への一方的傾斜が特徴的であったことを明らかにした。

第2章では、改革開放初期である1980年代の美術教員養成について、主に中央政府が制定した国定美術教員養成カリキュラムと文献調査をもとに考察した。まず、社会転換期である1980年代が目指す教育の現代化について、政府側の方針および諸外国との関連性について述べた。次に、社会転換期における美術と美術教育の変化について、文化大革命時期への反省から欧米の現代的な芸術表現に対する受容と、小中学校教育で展開された「美育・美感教育」の概念を整理した。そして、師範系学校の教員養成課程の変化と美術学院の参与から美術教員の養成状況について述べた。最後に、改革開放初期の美術教員養成課程における美術教育内容の特徴については、主に1980年代の国定美術教員養成カリキュラムを建国初期と比較して考察した。その結果、改革開放後に生じた、教育全体における「美育」の重点化と鑑賞教育、西洋美術の積極的な受け入れ、中国伝統美術による国を愛する心情の涵養、デザイン教育の展開が1980年代の美術教員養成のカリキュラムに与えた影響について指摘した。具体的に言えば、外国美術と中国伝統美術の教育においては、西ヨーロッパを中心とする西洋美術への理解が拡大したことは一つの大きな変化であった。一方、中国伝統美術の教育も小中学校美術教員養成課程においても強化された。無論、伝統美術の学習は自国の伝統文化への理解を促すという教育価値があるが、当時では中国伝統美術による国を愛する心情を養う教育としての側面が強く期待されていたことが特徴的である。そして、1980年代に美術教員養成課程で導入されたデザイン教育は、実用性や機能性と、日常生活との関連を重視するデザイン教育であることを明らかになった。また、審美力の育成は高等師範専科学校と中等師範学校でも重視されており、それらがどのようにカリキュラムに影響や変化を与えているかを明らかにした。

第3章では、現代中国における美術教員養成の現状について、主に政府が2000年以後制定した国定美術教員養成カリキュラムと教員養成現場の美術教員養成カリキュラムをもとに考察した。まず、高度経済成長期の時代を迎えた2000年代の教育改革について、国家や社会側から求められる質の高い教育との関連性を述べた。そして美術教育の変化について、小中学校美術教育課程の改革による変更点を述べた。また、教員養成制度の変化について、教員資格制度との関連性、教員養成における学歴水準の向上、高等師範系学校の移行と昇格の状況を整理した。

次に、政府側が定めた美術教員養成専攻である美術学（教師教育）専攻の美術専門科目をどう理解するのか、歴史変遷の中でどのような方向に向けて発展していくのかについて、1980年代の国定美術専門科目との比較を通して考察した。最後に、教員養成現場側が定めた美術学（教師教育）専攻の教育状況と特徴について、7つの高等師範大学の教育環境、カリキュラムモデルを総合的に分析し、さらに政府側が定めた美術専門教育の傾向と比較する中で現れた教育現象を考察した。その結果、学校美術教育課程の改革と教員養成機関の昇格と改革を背景にした2000年代の美術教員養成は、より基本的な専門教養を身につけた上で、幅広い美術専門教養、創造的な美術表現力、学校美術教育を理解と指導できる実践力の育成において、制度側においても教員養成現場においても同じ方向を目指していたことがわかった。また教員養成現場は、新しい教員養成環境の中で多様な美術教員養成カリキュラムモデルを創出したが、それらのカリキュラムは全体的に絵画教育への傾斜が特徴的であった。この要因は歴史的に絵画教育が美術教員養成課程において長く影響していたことに関連していると推察される。

第4章では、戦後日本の美術教員養成について、主に教員免許制度と教員養成現場の美術教員養成カリキュラムをもとに考察した。まず、戦後日本の教員養成制度の改革について、アメリカによる影響のもと「開放制の教員養成」・「大学における教員養成」の確立、教員養成機関の変化の側面から述べた。そして、戦後の美術教育の変化について、美術教科の小中高等学校教育課程での位置付けと教育内容の変化を整理した。次に、美術教員養成における制度的な関与について、教員免許制度による教職課程の歴史変遷、特に中学校と高等学校美術教員免許状の取得に関わる美術・工芸教科に関する科目の変遷を検討した。そして、教員養成現場の美術教員養成の実施状況について、東京学芸大学の美術教員養成課程を一例として、その美術専門教育の内容と変遷を整理した。また、第3章で提出した「教員養成における独自の美術教育の創出及び教育実践との連携」という課題への対策について、日本の鳴門教育大学が教員養成に導入した「教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラム」について考察した。最後に、美術教員養成における日中比較を行い、これまでの研究成果を踏まえて、美術教員養成における両国の共通点と相違点を考察した。その結果、まず制度面については、両国の教員養成制度が美術教員として備えべき基礎的な資質の確保という点において共通しているが、中国のほうが日本より関与度が高いとわかる。そして、小学校教員の担任制度も両国の美術教員養成課程の設置に影響を及ぼしていたことを明らかにした。次に、美術教員養成カリキュラムについては、中国の教員養成機関

における近年の改革が多様なカリキュラムモデル創出につながっていることや、両国におけるカリキュラムの異なる傾向性を明らかにした。最後に、両国の美術教員養成における工芸教育と絵画教育の歴史変遷から、中国における外国美術教育や芸術文化の受容にもつ独自性について論じた。

本研究を通して明らかになったのは、日本の美術教員養成と異なる独自の展開を行った、現代中国における美術教員養成が制度側および教員養成機関側で現れた傾向に関わる歴史的要因と課題である。それは、中国の「大学における教員養成」の改革が進んでいく中で、美術教員養成領域が持つ独自性への把握、そしてアカデミズム志向への傾斜という課題の解決にとって一つの参考として貢献してゆくものになり得ると考えている。